経済研究
Vol. 60, No. 4, Oct. 2009

巻頭の言葉

――『経済研究』60周年に寄せて――

都留　康

『経済研究』は1950年に産声を上げた．その後，高度成長，石油危機，バブルの形成と崩壊，社会主義から資本主義への体制転換，情報技術革新などの数多くの社会経済的変動が生じた．それらの事象を分析対象とする論文を折にふれ掲載しながら2009年に第60巻記念号を刊行することとなった．

『経済研究』第60巻記念号の目的は，基調論文，分野別展望論文，総索引などを通じ，過去30年間の航跡を振り返り，これからの針路を構想することにある．

この号を編むに当たり2つのことを心がけた．まず第1に，過去30年の研究動向を振り返る基調論文(西沢保執筆)の体裁をできる限り第30巻記念号のそれ(藤野正三郎執筆)とパラレルにした．両者を読み比べることにより，今回の30年の推移が前回の30年間の動向と比してどう異なるのかが鮮明になろう．第2に，各分野の回顧と展望を前回のような内部者(経済研究所教員)による座談会ではなく，外部有識者によるサーベイ論文という形式を採った．このことは，『経済研究』の「創刊のことば」で都留重人が重視した「土俵の外」を意識してのことである．また，論文という形式により専門家の深い吟味も可能となった．膨大な時間を費やされた専門家諸氏には深甚の謝意を表したい．

その一方で，サーベイ方式の代価として，研究領域を掲載本数の多い分野に限定せざるをえなくなり，万遍ない展望を行うことができなかった．取り上げえなかった秀作が数多くあることが悔やまれる．

いうまでもなく，経済学はイギリスやヨーロッパ諸国で生誕し発展した．だが，第2次大戦後にはアメリカで制度化・精緻化され今日に至っている．その結果，学の「覇権」の中心は大西洋を大きく移動した．事実，経済学のトップジャーナルの多くはアメリカで刊行されている．最近では，日本でも，英語で論文を書くことが重視され，できればアメリカの，それが無理ならヨーロッパのジャーナルに掲載することに大きな価値が置かれている．アメリカの経済学界でもっとも競争がきびしいから，そこで「もまれる」ことが質の高い論文を仕上げるために重要である．

では，日本語論文を掲載する『経済研究』の役割はやがては縮小する運命にあるのだろうか．おそらくそうではない．アメリカ経済とは異なる制度・慣行を有する日本やアジア経済，ロシア・東欧・西欧経済の実証分析や，アメリカ的発想法とは異なる理論研究の成果をまず自らの母国語で発表し，自らの研究者コミュニティーに提示することはいぜんとして重要である．また，日本語により政策立案者や企業経営者に厳密な分析結果を伝え，流布している通念が根拠薄弱かもしれないと警鐘を鳴らすことも政策を誤らないために大事である．こう考えると，日本の経済学者は，これからも英語と並行して日本語で論文を書き続けるに違いない．こうした文脈の下で，『経済研究』の使命は質の高い日本語論文を掲載し，その成果を狭義の学界・研究者だけでなく，広く政策を構想する人々にも発信し続けることにある．これが本号の諸論考から導かれる『経済研究』の今後の針路にほかならない．

最後に，『経済研究』が様々なレベルの協働によって成り立っていることを記しておきたい．学術雑誌にとって著者や投稿者が重要であることは自明である．しかしながら，『経済研究』刊行プロセスの上流から下流まで，すなわち企画・編集から印刷・流通に至る「バリュー・チェーン」の各段階での人々の努力が本誌を成り立たせている．使用された資料を収集しデータを整理された職員や研究補助者，レフェリーや定例研究会での討論者，編集委員と編集部，そして岩波書店，精興社，および桂川製本，これらの方々の努力なしには『経済研究』は成立しえない．「たいせつなことは目に見えない」(サン・テグジュペリ)．この当たり前の原則にあらためて思いをはせた．ここに感謝の気持ちを添えてこの記念号をお届けする．

(『経済研究』編集主任)